



TITLE:

日月蝕の和歌俳句

AUTHOR(S):

畝川, 哲郎

CITATION:

畝川, 哲郎. 日月蝕の和歌俳句. 天界 1943, 23(264): 184-185

ISSUE DATE:

1943-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168612>

RIGHT:

日月蝕の和歌俳句

Verses of Eclipse.

畝 川 哲 郎 *Tetuo Uekawa.*

“天界” 261號の川添氏の茶碗の記等、面白く拜見しました。その文中に「明治以前の日月蝕の句は此れ以外にはないと思はれます」との言葉を見ましたが、私は他に見たものがあるので紹介します。

一茶の「おらが春」の句集の中

月蝕皆既 亥七刻右方ヨリ缺、子六刻甚ク、丑ノ五刻左終

人数は月より先へ缺にけり 一茶
人の世は月もなやませ給ひけり
潜上に月の缺るを目利かな
酒盡てしんの坐につく月見かな

があります。時刻なども明示しており、よく味つて見ると、實に面白いものだと思います。

尙、外國やその他の文獻とくらべて見るのも興味あるものでせう。

なほ、一茶の俳句中、目をひくものを述べますと「我春集」の中に

七月廿六日ころより北方七星の邊りに
稻つかねたらんやうなる星現るる老人
豊秋のしるしといふ。

人並や芒もさわぐははき星 一茶

尾を長く引いた彗星、これを見て世の人々はさぞ大騒ぎした事でせう。「豊秋のしるしだ」などと落ち着いてゐる老人の顔も想像されて、愉快です。

これは、文化8年の作でせう。7年では無いと信じます。文化8年といへば皇紀2471年、西暦1811年です。

何で見たか、この彗星は、1811年三月26日に、フラエルゲスが發見したもので、17ヶ月も見え、尾が25度に及んだと私は記録してゐます。ハッセルは、この彗星を觀測して、彗星が自光を放つことを知り得たと云ひます。

尾が常に太陽の反対に向ふ事実を見て、オルベルスは、それは電気の斥力によるものではないかと論じたのも、この一茶の見た「ははきぼし」だつたのです。同じく此の文化8年の彗星が登場するものに、カミュー・フラマリオン著の「世界の終り」といふ本があります。

「^{アカデミ}學士院常任幹事が立つて、『今回の彗星が若し1811年の彗星と性質を同じうすれば、地球は火焰に包まれて、人類は悉く無残な最後をとげるだらう』と言つた」

と、その物語りにのせておます。

一茶が驚いてゐる頃、西洋では學術の研究が進められてゐた事など、面白いではありませんか。かく、いろいろ東西洋を文獻で比較するのも興味があります。

ひどく脱線しましたが、もとの日月蝕の歌として、

I 拾遺和歌集の中に

日蝕の時、太皇太后宮より一品のみこの
許へつかはしける

逢ふことのかくてや遂にやみの夜の
おもひも出でぬ人のためには

II 西行の山家集に

日蝕の題にてよみけるに
いむといひて影にあたらぬこよひしも
われて月みる名やたちぬらむ

III 新後撰集に法印法験の

春のころ月蝕を祈りて思ひつづける
かすむだに心づくしの春の月
くもれといのるよはもありけり

IV 俳句には

蝕に雨に二夜の月を年ぞかし (白雄)
練絹の色もうるむや月の蝕 汝村

以上5句が金井紫雲著の「天象と藝術」に出されてありました。参考に引かして頂きます。(終り)